

吉江喬松のグルノーブル

渋谷 豊

キーワード：吉江喬松 グルノーブル CPEE 日仏比較文学

はじめに

昨年（二〇一九年）度の本紀要に掲載された拙論「吉江喬松『アルプス連峯の輝き』試論」では、詩人、小説家にして日本におけるフランス文学研究の草分けの一人でもある吉江喬松（筆名、孤雁）のエッセー「アルプス連峯の輝き」の第一部と第二部を比較文学的観点から読解した。本稿はその続きとして、「アルプス連峯の輝き」の第三部を念頭に置いて構想されたものである。ただし、第三部はフランスの地方都市グルノーブルの自然と生活を主題とし、その背景には作者のグルノーブル滞在経験があると考えられるのだが、その実態はいまだに不明な点が多い。そのため、本稿では作品そのものの読解を試みるのではなく、吉江のグルノーブル滞在に関するデータを覚書風にまとめることとする。注目するのは、グルノーブル行の時期と理由、グルノーブルの「夏期大学」の内実、同地でのセルビア文芸との接触の背景、の三点である。

※

1. グルノーブル行の時期と理由

吉江喬松が洋行の途に着いたのは一九一六年六月であり、約四年間の遊学を終えて帰国したのが一九二〇年七月である。遊学中の主な滞在地はパリだったが、ただし、ふた夏続けて彼はアルプスの麓の地方都市グルノーブルを訪れた——と、ここまでは研究者の間ですでに周知の事柄であるが、ただし、その「ふた夏」が正確にはいつのことであったかということは改めて検討されてよい。そこが明らかになれば、彼がパリを離れてグルノーブルに赴いた理由も見えてくるかもしれない。

吉江が様々なエッセーの中で述べていることから推して、一九一八年の夏に彼がグルノーブルにいたことはまずまちがいない。一つだけ例を挙げれば、「スタンダールの故郷」（このタイトルはグルノーブルを指す）にはこう記されている。

これは十八年の夏のことであったが、グルノーブルから一哩ばかりに在った大火薬庫が爆裂した。[……] 弾丸の爆発するような響きが連続して、およそ三四時間ぐらいつづいていた。全市の住民は遠く逃げだして、反対の方向の郊外は左右に行き交う避難民で一面であった。午後の二時から起こったので、その晩一夜の中に全市はどうなること

ともわからなかった。[……] 宿のもの四五人と行き、[ママ] 交う人々の間をくぐって、イゼエル川を渡って、山陰になっているラ・トロンシュという村まで逃げのびることにした¹。

この文章は著者の実体験に基づくものとして差し支えないだろう。この爆発が生じたのがまちがいなく一九一八年の夏であったことは、当時のフランスの新聞で確認できる²。

従って、吉江が二年連続してグルノーブルを訪れたのだとすれば、それは「一九一八年、一九一八年」か「一九一七年、一八年」かのどちらかであったということになる。

吉江の没後間もなく刊行された『吉江喬松全集』第六巻の年譜にはこう記されている。

大正六年、五月、故国に於いて、アナトール・フランス原作『ジャンヌ・ダルク』を、九月には又、マアテルリンク原作の『貧者の宝』を翻訳上梓した。

パリに於いては、この年は冬期に火気もなく、パン、砂糖も統制せられ、翌一九一八年（大正七年）には長距離砲の攻撃、敵機襲来が頻りであったが、大学の講義は依然として続けられていた。同年四月、一時戦果を避けて、リヨンより地中海沿岸の南国を歴訪して、スタンダールの故郷グルノーブルに赴き、この美しい山間の都市で、二年夏期大学を聴講した。この年、母国に於いては島村抱月逝く³。

「同年四月、一時戦果を避けて [……]」の「同年」とは一九一八年のことだから（吉江の恩師、島村抱月がスペイン風邪で他界したのは一九一八年である）、この年表を読めば、吉江が一九一八年と一九一八年の夏にグルノーブルに滞在したと考えるのが自然だ。これが「一九一八年、一九一八年」説（と仮に呼んでおく）の発端であり、その後、研究者たちは特に疑うこともなくこの説を受け継いできたように見える。吉江研究の基本文献とも言うべき赤松昭の論考「吉江喬松」にはこうある。

大正六年のパリは冬期に火気もなく食糧品の統制が始まり、翌七年にはドイツの長距離砲や飛行機に脅かされたが大学の講義は依然として続けられた。四月、喬松は戦果を避けてリヨン地方を巡り、その後はスタンダールの故郷グルノーブルに滞在して二年間夏期大学を聴講した。この年の十一月、恩師島村抱月が死去した⁴。

赤松昭「吉江喬松」は詳細な書誌を含む貴重な文献だが、この箇所に限って言えば『全集』の年譜の敷き写しというのに近い。『全集』の年譜は根津憲三、桜井成夫、日夏耿之介の編

¹ 『全集』第三巻一七二―一七三頁。（『吉江喬松全集』全八巻は白水社から一九四一―一九四三年に刊行された。本稿では『全集』と略記する。引用に際しては、旧漢字、旧仮名遣いは原則として新字に改める。）

² 一九一八年七月二日の「フィガロ」紙の第二面には「グルノーブルで爆発」*Explosions à Grenoble* の見出しで、「一昨日の晩、グルノーブルの砲兵射撃演習場の弾薬庫で爆発が続いた。爆発は夜一時半まで治まらず、火災が発生した」云々と記されている。Le Figaro, mardi 2 juillet 1918, p. 2.

³ 『全集』第六巻、五三六頁。

⁴ 赤松昭「吉江喬松」昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第四六巻、一九七七年、九一―九二頁。

纂になるもので、この三人はそれぞれ生前の吉江をよく知る人物だった。その信頼度は高い。だが、ことグルノーブル滞在時期に関しては、年譜の記述は間違っている。実際には吉江は一九一七年にすでにグルノーブルを訪れ、そこでひと夏を過ごしたはずなのだ。つまり、「一九一八年、一九年」ではなく「一九一七年、一八年」が正しい、ということだ。

そう考える根拠はいくつかある。まず、そもそも吉江本人が「スタンダールの故郷」でこう述べているのである。

リヨンよりグルノオブルへ四五時間の汽車の旅程は、人々を、アルプ・フランセエズを背後にした、イゼエルの流れを前にした、仏蘭西の都市の中では最も豊かな、最も美しい山中の一都市へ導いて行くのである。

青く澄みきった八月の空の下にも消えずに光っているベルドンヌ連嶺の雪をながめた人は、何人でも第一に嘆美の声を挙げずにいられまい。私が第一回目にこの町へ、日本人の一人もいないこの町へ来て、夏じゅう四ヶ月滞在していたのは千九百十七年のことであった⁵。

また、吉江が一九一七年の夏に日本の家族に送った数葉のハガキからも、彼がグルノーブルに滞在していることが窺える。例えば同年七月八日付の妻貞子宛のハガキには「大使館宛てでよろしく、回送してくれますから。山の中腹だけに涼しくて夏中冬服で暮らせませう」とあり、表面には

山はアルプスの連山で川はイゼエルといって町中を流れています。私の宿からアルプスが常に見えています⁶。

と記されている。おそらくこのハガキは絵ハガキで、表面に書きつけた言葉は写真の説明なのだろう（イゼール川はグルノーブルの中心の北側、バステューユ城砦の麓を流れる）。

さらに吉江のエッセー「アルプの麓」の発表時期のこともある。「アルプの麓」は「巴里からこの地、ドオフィネの都グルノオブルへ来て見ますと、如何にもアルプ山岳地方の感じがひしひし身に迫って来ます⁷」の一文で始まり、末尾に、

もうその夏も終って、旬日を出でずして私はまた巴里へ帰ります。天際を限っているベルドンヌの連峰が落日に照らされて薄紅にほんのりと輝き、中腹以下は暮靄に包まれて、只その頂の連りだけを遠く空際に仰ぐのは、全く不思議な、この世ならぬものに向うような感じを覚えます⁸。

とあることから察せられるように、グルノーブルでの実地の見聞を日本の読者に伝える

⁵ 『全集』第三卷、一六〇頁。

⁶ 『全集』第八卷、三一頁。

⁷ 『全集』第三卷、七四頁。

⁸ 同前 九〇頁

エッセーだ（バルドンヌはグルノーブルを囲む山塊の一つ）。

この「アルプの麓」は帰国後の一九二一年に上梓された『佛蘭西印象記』に収録されているが、もとは新聞紙上に連載された。吉江がフランスから日本の新聞社に書き送ったエッセーなのだ。赤松昭によれば、初出は「東京朝日新聞」一九一八年一月一日～八日であり、その時点のタイトルは「アルプの麓より」だった⁹。より正確を期せば、同紙に掲載されたのは一九一八年一月一日、二日、三日、五日、七日、八日で、タイトルには「(流鼠のセルビヤ人)」という副題がついていた（この副題については後述）。また、このエッセーの末尾に「もうその夏も終って、旬日を出でずして私はまた巴里に帰ります」とあるのは初出時も『佛蘭西印象記』に収録されたテキストでも変わらないが、初出時にはさらに文末に「十月二十二日」と日付が添えられている。要するに、一〇月二二日に擱筆した文章が、翌一九一八年の正月の新聞に連載された、ということだろう。となると、やはり吉江は一九一七年にはグルノーブルを訪れていたのでなければならない。

なお、一九一七年のいつからいつまで吉江がグルノーブルに滞在したのかは正確には分からないが、ここまでに引用した文章から推して、だいたい七月の始めから十月の終わりまでの約四か月の滞在だったと考えてよさそうである。

さて、こうして吉江が一九一七年にグルノーブルに滞在していたことが明らかになると、彼がパリを離れた理由についても再考の余地が生じる。『全集』の年譜および赤松の論考には「戦火を避けて」とあった。また、おそらくそれを受けてのことだろう、高田充也『孤雁物語—伝記 吉江喬松—』には、いつ吉江がパリを離れたのかは明記されていないものの、次のような件がある。

孤雁はソルボンヌ大学で、古典劇や近代文芸の聴講研究で、目的の成果をおさめると、激しくなってきた戦火をさけて、リヨンから地中海沿岸、南国を訪ねた。それからスタンダールの故郷グルノーブルの大学へ行き、二年間聴講を受け、フランス文学を更に深めることができた¹⁰。

だが、一九一八年ならいざ知らず、一九一七年の時点で吉江が「戦果を避け」る必要を覚えていたかどうかは疑問である。

ドイツのツェッペリン飛行船がパリの空爆を開始したのは一九一五年三月であり、翌一六年一月にはかなりの被害が出ている。ただし、この時点で吉江はまだ日本にいる。その後、同一六年二月から一二月まで有名なヴェルダンの戦いがあり、一九一八年三月二三日にはドイツ軍がパリの約一四〇キロ先から長距離砲でパリ砲撃を開始する¹¹。その被害は深甚だった。だが、ヴェルダンの戦いと長距離砲によるパリ砲撃との間の時期、ことに吉江がグルノーブル行の準備をしていたと思いき一九一七年春から夏にかけてはどうだったのだろう。当時、少なくとも吉江の目には戦況は次のように映っていた（以下の引用中の「ゼプラン」

⁹ 赤松昭、前掲書、一〇三頁。

¹⁰ 高田充也『孤雁物語—伝記 吉江喬松—』塩尻市教育委員会、一九九九年、四六頁。

¹¹ *Encyclopédie de la Grande Guerre 1914-1918*, sous la direction de Stéphane Audoin-Rouzeau et Jean-Jacques Becker, Bayard, 2004, p. 1294.

は「ツェッペリン」のフランス語風表記)。

今もなお、巴里の夜の更けた一時か二時頃に、遠く秧鶏の鳴くような、又軽く戸口を叩くような音が聞こえて来ます。併しこれは決して渡り鳥の鳴き声などではないのです。ランスの先方あたりで両軍が交わす砲撃の轟です。そして夜中俄かに街上が騒がしくなることが時々あるので、何事かと高い窓を開けて見ると、流星の飛ぶように、巴里城塞の四方の上を、飛行機が爆声を立てながら幾つも飛んでいます。ゼブランの来襲を防ぐためだそうです。

併しそれはいつもの虚報にすぎず、杞憂に過ぎずして終わってしまいます。実際、ヴェルダン戦以来、当局者も一般人も最早深い自信のもとに落着いた日を送っています。リュクスambuulのミュゼエの一部が開かれたのを見ても安心なことは争われなと思います。そして戦勝を予期して、戦後の文学、主として劇の将来はどうなるかと、或いは講演に、或いは雑誌に、新聞紙上に人々が論じはじめました。その中にも先日アルフレッド・カピュスのラ・ソシエテ・デ・コンフェランスで講演した『劇及び当来の公衆』という講演は最も興味深いものの一つだと思います。これ等のものを少しまとめてからいづれ後日申し上げることにいたしましょう¹²。

確認しておく、「マロニエの若葉」と題されたこのエッセーにおける「今」とは一九一七年の春、より正確には五月二〇日のことだ。そのことは、同じエッセーに、「今日はジャンヌ・ダルクの記念日¹³」であり、「マルスラン・ベルトゥロの記念像の除幕式¹⁴」も催されたと述べられていることから分かる。

このエッセーによれば、この頃の吉江はアルフレッド・カピュ Alfred Capus の講演を聴きに行つて戦後の演劇界に思いを馳せる一方で¹⁵、モー（パリ東北東の町）出身のフランス人父娘と一緒にパリ市内の公園を散策したり¹⁶、一人きりで郊外のアルジャントゥーユへの日帰り旅行を楽しんだりしていた¹⁷。どうやら彼自身もまた「最早深い自信のもとに落着いた日を送って」いたようだ。危険が身に迫っていると感じていたようには見えない。何しろ「安心なことは争われな」と言い切っているのだ。その吉江が戦火を逃れて疎開する姿は想像しにくい。

¹² 「マロニエの若葉」『全集』第三卷、五七-五八頁。

¹³ 同前、七三頁。一九一七年五月二〇日にパリのピラミッド広場で催された式典の写真をフランス国立図書館の Gallica で閲覧できる。https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b530031012.item]

¹⁴ 『全集』第三卷、七二頁。一九一七年五月二〇日の除幕式の写真をやはりフランス国立図書館の Gallica で閲覧できる。https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b53002860d/fl.vertical

¹⁵ この講演会は一九一七年三月三〇日に開催されたと考えられる。前日二九日の「フィガロ」紙第四面に広告記事が載っている。「明日の演劇はどうなるか。世界中を混乱に陥れた出来事の翌日に、公衆 public はどんな気持ちでいるか。塹壕から戻ってきた兵士たちは何を求めるか。これが、アルフレッド・カピュ氏が三月三〇日金曜日二時半から講演協会（サン＝ジェルマン大通り一八四番地）で行う講演のテーマである。演題は『演劇と明日の公衆。』」Le Figaro, jeudi 29 1917, p. 4. アルフレッド・カピュは当時人気の高かった劇作家（一八五八-一九二二）。

¹⁶ 『全集』第三卷、六五-六八頁。

¹⁷ 同前、六八-七二頁。

おそらく彼は戦争のためにやむなくパリを離れたのではないのだろう。他に理由があったにちがいない。では、なぜパリを離れ、他ならぬグルノーブルに向かったのか。少なくとも研究の現段階では、グルノーブルの「夏期大学」に通うことに積極的な意義を見いだしていたから、と考える以外に手が無い。

2. グルノーブルの「夏期大学」

グルノーブルの「夏期大学」には『全集』の年譜に言及があるものの、管見によれば、その実態はこれまで明らかにされてこなかった。実は、この「夏期大学」とは CPEE（外国人学生支援委員会 Comité de patronage des étudiants étrangers）の主催する外国人向けの講座のことである。それ以外には考えられない。

CPEE は一八九六年にマルセル・レイモン Marcel Reymond（一八四八—一九一四年）を中心にグルノーブル大学内に作られた組織である。マルセル・レイモンはグルノーブルから南へ四〇キロほど離れたラ・ミュール出身の美術史家で、『フィレンツェの彫刻』¹⁸などの著書もあるが、大学人ではない。在野で研究活動を行っていた彼がグルノーブル大学と手を組んで、外国人向けの講座を創設したのである。このマルセル・レイモンと CPEE については、マルセル・レイモンが亡くなった二年後の一九一六年にグルノーブル大学文学部長ポール・モリヨ Paul Morillot が発表した「マルセル・レイモンの大学での仕事」に詳しい¹⁹。なお、一九二二年九月一六日には CPEE の創設二五周年が、さらに一九七一年一二月一〇日には創設七五周年が祝われ、それに併せて記念文集が刊行された。その記念文集二冊も参考になる²⁰。

グルノーブル大学における外国人向け講座の創設は、大局的に見れば、自国の言語、文化を世界各地へ広めようとするフランスの言語政策の一環であった。この観点からすれば、同大学の取組はアリアンス・フランセーズの設立（一八八三年）に続く先駆的、画期的なものとして評価される²¹。また、より内情に即して言えば、新制大学が発足し、フランス国内の各大学が試行錯誤を行った時代の産物でもある。フランスでは大革命後、学部 faculté は大学 Université の構成要素ではなくなり、各学部が相互に関係を持たない独立した教育機関として存在していた。だが、一八九六年に「総合大学設置法」Loi à la Constitution des Universités が発布され、複数の学部を束ねるところの大学が改めて制定される。それと共に各地の大学の間で競争が始まり、地方の小規模大学は資金と学生の獲得のために工夫を凝らす必要に迫られる。そこでグルノーブル大学が打った手が外国人向け講座の創設だった²²。さらに言えば、グルノーブル大学には地元住民との連携を強め、地域における大学の

¹⁸ Marcel Reymond, *La Sculpture florentine*, Florence, Alinari frères, 1887.

¹⁹ Paul Morillot, « L'Œuvre universitaire de Marcel Reymond », *Revue internationale de l'enseignement*, 1916, t. 70, p. 110-122.

²⁰ Université de Grenoble, Comité de Patronage des Étudiants Étrangers, *Célébration du 25ème anniversaire de la fondation du comité, samedi 16 septembre 1922*, Grands établissements de l'imprimerie générale, 1922. Université de Grenoble, *Soixante-quinzième anniversaire de la fonction du Comité de Patronage des Étudiants Étrangers*, Imprimerie Allier.

²¹ Paul Morillot, *art. cit.*, p. 114.

存在感を高める狙いもあった。グルノーブルの町はアルプスの「玄関口」として知られるものの、アルプスを訪れる登山客にとっては単なる通過点にすぎない。いかにして外国人旅行者をグルノーブルに留まらせ、町を活性化するか。外国人向け講座の創設はこの問いに対する一つの答でもあり、マルセル・レイモンは「地域と大学の契約の象徴」²³とも言うべき存在だった。以上の三つの経緯、目的で創設されたこの講座は、そこで学んだ吉江が帰国後、早稲田大学フランス文学科初代教授として日本のアカデミックな仏文学研究の草分けの一人になることを思えば、日仏文化交流史の中でそれなりの位置を占めるべきものだ。

CPEE が主催した外国人向け講座は「夏期講座」と「年間講座」の二本柱から成る。創設されたのは夏期講座が先で、一八九八年から受講生を受け入れていた²⁴。吉江が登録したのも「夏期講座」であったはずだ。現在では夏期講座（サマースクール）を開くフランスの大学は珍しくないが、CPEE 発足時はまだ夏の「ヴァカンス」中に「授業」を行うことが「矛盾」と受けとめられていたという²⁵。そもそも CPEE はグルノーブルに外国人学生が数多くいて、外国人向けの語学教育を望む声が高かったが故に創られた組織ではない。その逆で、需要があるからではなく、需要を創出するところから出発した企画だった。

マルセル・レイモンの理念は立派だったが、その実現が容易いものでなかったことは指摘しておこう。というのも、一八九六年にグルノーブルに外国人学生はいなかったからだ。外国人学生を呼び寄せる必要があった。彼は一人か二人の受講生を相手にするところから始めた。彼が受講生の住まいや食事の世話をし、最初の授業を行ったのも彼だった²⁶。

マルセル・レイモンは授業については、じきに担当をグルノーブル大学文学部の教員に委ねるが²⁷、「受講生の住まいや食事」など実際の、実用的な面での学生支援は率先して推し進めた。「ホームステイ」という言葉すらなかった時代に、外国人学生を受け入れてくれる家庭を募り、家族経営の下宿屋 *pension de famille* を増やそうと努めた結果、一九一六年（つまり吉江のグルノーブル滞在の前年）には CPEE は千人以上の学生に住まいを提供できるまでになっていたという²⁸。吉江は一九一七年七月八日に日本の妻にハガキで「当地の或る

²² *Ibid.*, p. 110-111. 一八九六年の総合大学設置法については次の論文も参考にした。向井一夫「フランスにおける総合大学設置法（1986年）制定の意味と限界」『椋山女学園大学研究論集』第二二号（第一部）、一九九一年、一二三-一三三頁。

²³ Paul Morillot, *art. cit.*, p. 111-113.

²⁴ *Ibid.*, p. 116. 以下も参照のこと。「Discours de M. Aimé Bouchayer, président du comité », *Célébration du 25^{me} anniversaire de la fondation du comité, samedi 16 septembre 1922*, *op. cit.*, p. 6.

²⁵ « Allocution de M. André Robert, professeur à l'université des langues et lettres, secrétaire général du comité de patronage », *Soixante-quinzième anniversaire de la fonction du comité de patronage des étudiants étrangers*, *op. cit.*, p. 26.

²⁶ « Allocution de M. Jean Bouchayer, président sortant du comité de patronage des étudiants étrangers », *Soixante-quinzième anniversaire de la fonction du comité de patronage des étudiants étrangers*, *op. cit.*, p. 21.

²⁷ Paul Morillot, *art. cit.*, p. 116.

²⁸ *Ibid.*, p. 117-118.

家庭へ入って色々仏人の家庭の様子などもわかって面白く思っています」と書き送っているが²⁹、この「家庭」も CPEE に斡旋してもらったのではなかっただろうか。ちなみにエッセー「スタンダールの故郷」には、「私の居た宿」の年老いた夫人とその甥、そして甥の幼い娘との交流の一端が描かれている³⁰。グルノーブルで過ごした夏は、彼にとってフランス人の家庭生活に直に触れる貴重な機会となったにちがいない。

マルセル・レイモンは授業外の活動を充実させることにも尽力した。グルノーブルの地の利を活かし、アルプスやその周辺の花々へのエクスカージョンを頻繁に催すのである。グルノーブル市内の美術館巡りなども行った³¹。だが、彼が何よりも力を注いだのは宣伝活動だったという。外国人学生をグルノーブルに呼び寄せるために、あらゆる媒体を利用して CPEE の外国人向け講座の宣伝に励んだのである³²。その甲斐あって、早くも一九〇八年度にはグルノーブルの留学生の数が千人を超えていた（正確には一一〇四人）³³。CPEE の夏期講座の評判が吉江の耳にまで届いていたことには何の不思議もないし、山を愛する吉江がそれに心をそそられたであろうことも想像に難くない。

CPEE の教育方針やカリキュラムを検討した学術論文に、イザベル・グリユカ「一八九六年から一九七五年までに CPEE が編成した教育——現代性と伝統の間で」（一九九七年）がある³⁴。それによると、CPEE のカリキュラムの特色は、何よりもまず文学を重視する点にあったという。CPEE の講座は外国人学生のための語学講座として創設されたものであるが、単なる実践的な語学力（会話力など）の育成ではなく、文学的教養を身につけさせることに比重を置いていた。そして、そのことは第一次大戦中、つまり吉江が夏期講座を受講していた時期も変わりなかったという。

第一次世界大戦中、特に一九一五年度は大学教育全般が混乱に陥ったが、特筆に値するのは、その時期でさえも CPEE の主要な関心が、いくらかの縮減はやむを得ないとしても、文学の授業の大半を維持することにあったということである³⁵。

また、この論文では CPEE が大戦中にフランス語の教員養成を目的とした授業を設けていたことも指摘されている³⁶。（ただし、大戦中に行われた文学関連の授業や教員養成のための授業の具体的な科目名、開講数などの詳細は論文中に示されていない。）著者のイザベル・グリユカはグルノーブル第三大学に所属していた人物であり、一般にはアクセスが困難

²⁹ 『全集』第八巻、三一―一頁。

³⁰ 『全集』第三巻、一六六―一六七頁。

³¹ Paul Morillot, *art. cit.*, p. 118-119.

³² *Ibid.*, p. 116-117.

³³ *Ibid.*, p. 121.

³⁴ Isabelle Gruca, « Les enseignements organisés par le Comité de Patronage des Etudiants Etrangers de 1896 à 1975 : entre modernisme et tradition », *Documents pour l'histoire du français langue étrangère ou seconde*, décembre 1997.

<http://fle.asso.free.fr/sihfiles/Documents/Documents%2020%20corrig%E9/Documents%2020%20pdf%20corrig%E9/h%20D20%20gruca.pdf> 2020/9/28閲覧。

³⁵ *Ibid.*, p. 93.

³⁶ *Ibid.*, p. 89.

な資料、とりわけ CPEE が毎年作成していたと思しき事業報告書 *Rapport annuel* を参照した上でこの論文を執筆しているのだが、残念ながら私はまだ吉江がグルノーブルに滞在していた時期の事業報告書を見つけることができずにいる。そこで、せめて参考までに一九二四年度の事業報告書を覗いてみることにしたい³⁷。

一九二四年度の事業報告書によれば、この年度の年間講座（一一月～六月）に登録した学生は三九二人、夏期講座（七月～一〇月）のそれは一〇六一人に上る。国籍別の学生数の表も載っているのだが、それによると年間講座、夏期講座ともに一番多いのはアメリカ人で、少数ながら日本人学生もいる（年間講座に日本人の男性が一人、夏期講座に日本人女性が三人）。前年度との比較も行われており、年間講座も夏期講座も総登録者数は増えているが、日本人の学生数に限れば、年間講座は前年度と比べて一人減、夏期講座は六人減である³⁸。言い換えれば、前年度はけっこうな数の日本人がグルノーブルで学んでいたことになる。

夏期講座に限って言えば、「カリキュラムの全体的構成は例年通りであり、午前中はできる限り言語、音声学、翻訳の講義と演習に当て、午後は文学、歴史、地理、哲学等の講義に当てた」とある³⁹。午後の授業を総括する名称は「講義：文学、哲学、歴史、地理、美術、文明」であったらしく、この「講義：文学、哲学、歴史 [……]」は「a) 文学と哲学」と「b) 歴史、地理、美術、文明」の二つに大別されている⁴⁰。以下はその二つの具体的な授業名と授業担当者、担当月である。

a) 文学と哲学

担当：モリヨ Morillot（文学部長）

七月：「フランス文学における女性の詩人・書簡作家・小説家」

十月：「十八世紀フランス喜劇」「ヴィクトル・ユゴーの小説」「ペローの童話」

担当：シュヴァリエ Chevalier（文学部教授）

七月：「セザール・フランクとその流派」

十月：「現代の思想家数名の横顔」

担当：ロンズィ Ronzy（文学部教授）

七月：「ロマン派の物語作家たち」

担当：デュリー Durry（文学部教授）

七月：「現代フランス演劇」

担当：ベセージ Besseige（師範学校長）

³⁷ Comité de patronage des étudiants étrangers près l'Université de Grenoble, *Rapport annuel, année scolaire 1924-1925*, Imprimerie Allier, 1926.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5698413d/fl.item.texteImage> 2020/10/14閲覧。現在、フランス国立図書館の Gallica で閲覧できる CPEE の事業報告書は、一九〇二年度のもの一九二四年度から一九三四年までの各年度のものである。つまり Gallica で事業報告書が閲覧可能な年度の中では、一九二四年度が吉江の滞在時期に最も近い。

³⁸ *Ibid.*, p. 3, p. 6-8, p. 11-12.

³⁹ *Ibid.*, p. 9.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 10-11.

- 八月：「モンテーニュから今日までのフランスの教育観」
 担当：ビリオン Billion（シャンポリオン高等学校教諭）
 七～八月：「アルフレッド・ド・ヴィニー」
 担当：ブリュノ Brunot（パリ大学文学部長）
 八月：「いかにしてフランス語は国語となりしか」
 担当：デュリー夫人 Mme Durry（上級教員資格者）
 七月：「現代フランス小説」
 担当：ロワゼル Loisel（ジャンソン・ド・サーユイー高等学校教諭）
 「一六六〇年の学派の原理」
 担当：ルノー夫人 Mme Renaud
 九月：「現代フランスの詩人たち」

b) 歴史、地理、美術、文明

- 担当：ブランシャール Blanchard（文学部教授）
 九月：「南フランス」「北アフリカのフランス領」
 担当：ペラン Perrin（文学部教授）
 九～十月：「一八一五年以降のフランス」「現代フランスの諸制度」「新聞による現代フランス」
 担当：ブラン Blanc（高等小学校教諭）
 九月：「フランスの教育組織」
 担当：ロゼンタル Rosenthal（リヨン大学文学部教授）
 九月：「現代フランス彫刻」

こうしてみると、やはり文学関連の授業が多いことが分かる。こと文学に関する限り、ひと夏のカリキュラムとしては充実していると言ってよい。扱う時代もモンテーニュから現代までと幅広い。セザール・フランクが「文学と哲学」の枠の中で講じてられているから、比較芸術論的な観点からの授業も行われていたのかもしれない。なお、肩書に所属大学名が記されず、ただ「文学部長」や「文学部教授」とだけある場合、その教員はグルノーブル大学所属であると考えられる。

事業報告書には夏期講座開催中の四か月間に催されたエクスカーションの一覧も載っている⁴¹。それによると計一五回のエクスカーションが実施されているから、課外活動もかなり活発だったと言えるだろう。日帰りのエクスカーションもあるにはあるが（例えば九月二日は、グルノーブルの市外から南に一五キロほどのところのプラトー・ド・サン＝タンジュに徒歩で向かい、その後、車でヴェルコール山塊の景勝地グラン・グレを訪れ、その日のうちに帰宅している）、しかし、大体は泊りがけだったようだ。例えばこの夏最初のエクスカーションは徒歩でトゥール・サン・ヴナン（中世の城の廃墟）を訪れた後、車でシャルトルーズへ赴くもので、七月一日から一二日にかけての一泊二日の行程だった。ちなみにこ

⁴¹ *Ibid.*, p. 15.

の夏、最も頻繁に目的地になったのはシャルトルーズで、計四回のエクスカーションでシャルトルーズを訪れている（ただし、毎回、必ず目的地が複数あるため、まったく同じコースになることはない）。シャルトルーズはカルトゥジオ修道会の修道院ラ・グランド・シャルトルーズで知られる、グルノーブル北方の山地。吉江はエッセー「秋」でその地を訪れたことを思い返しなが、ラ・グランド・シャルトルーズの今と昔を語っているが⁴²、はたして夏期講座のエクスカーションとは無関係にその地に足を運んだのだろうか。

もっとも、吉江が夏期講座に通ったのは何ぶんにも戦時下のことであり、学生数は一九二四年度よりもずっと少なかったにちがいない。授業やエクスカーションもこれほど充実していなかった可能性がある。その詳細を突きとめるにはさらに調査を続けなければならない。現時点で分かっているのは、当時、オーストリア、ドイツ、ブルガリアに祖国を占領されたセルビア人がフランスに数多く避難しており、グルノーブルに身を寄せた者も少なくなかったこと、その中には夏期講座に通う者もいたことである。

この地も戦争の初めは、伊太利の去就が判明しなかったので、万一を慮って、各国人の持ち運ぶ荷物の目方から、立ち退き先まで一時は定まったのだそうですが、今では伊太利への備えの山上の要塞も、黄枯れた灌木の谿谷と嶺とに連なって、朝夕の冷たい雲に包まれているだけで活動する機会は全くなく、幸いに、イゼエル河に沿うた此の美しい市街は砲撃の厄を脱れて居ます。

従って、この地の大学の夏期の外国学生は、今では半分は伊太利の女学生、他の半分は国も家もなくしてしまったセルビアの学生です。今セルブにとっては、佛蘭西は彼らの避難所になって居ます。巴里、リヨン、グルノオブルは勿論のこと、南方の小さな都市に至るまで、悉くセルブの学生及び小児等を收容して教養を與えているのです⁴³。

大戦中にセルビア人がフランスで創刊した『セルビアの祖国』*La Patrie serbe* という雑誌には、グルノーブル大学がセルビア人学生を手厚く迎え入れたことが報じられている。その記事によれば、CPEE がセルビア人学生のためにフランス語の特別授業（セルビア語とフランス語の間の翻訳の授業）を行い、かつ、セルビアの国情、文化、文学をグルノーブルの学生、市民に紹介する計四回の連続講演会を催したという⁴⁴。この記事が載ったのは同誌一九一七年六月号であるから、連続講演会が開かれたとき、吉江はまだグルノーブルに到着していなかった可能性が高いが、それはともかく、この記事からもやはりセルビア人学生が

⁴² 『全集』第三卷、三八四-三八七頁。

⁴³ 『全集』第三卷、七八頁。「スタンダールの故郷」には次のように記されている。「グルノオブルへ逃げて来ていたセルビアの青年等は、みな戦争当初マッケンゼンに追われて、四昼夜も食わず眠らずに逃げつづけたとの事であった。仏国の南部へはセルビアの児童等が引き取られて小学校教育を教えられ、青年は皆何か実用的な学問をしていつか興国の際に役に立つ者となろうと努力していた。／戦争前に山麓の夏期の大学町へ集って来た諸国の学生は、独逸人が第一で五六百人、ロシア人がこれについて三四百人であったが、それ等は、十七年には勿論一人もいなかった。アメリカの婦人が二人、アイルランドの青年が一人、埃及人が一人、和蘭人が一人、七八十人の伊太利の女学生と、二百人ばかりのセルブがいた。」同前、一六四頁。

⁴⁴ « Cours et conférences. Un cours sur la Serbie à l'Université de Grenoble », *La Patrie serbe, revue mensuelle pour la jeunesse serbe en exil*, juin 1917, p. 382-383.

この年グルノーブル大学にとって大きな存在になっていたことが窺える⁴⁵。吉江は彼らにけっして無関心ではなかった。そのことは、グルノーブルでの見聞を伝える「アルプの麓」が、新聞掲載時には「(流鼠のセルビア人)」という副題を持っていたことから察せられる。

3. セルビア文芸との接触

実際、「アルプの麓」は、吉江がセルビアに対して一過性の興味に留まらない知的好奇心を抱いていたことを示している。このエッセーで吉江はセルビアの歴史と風土を紹介し、その上で「そこでこういう事情の国に如何なる文学があるかということが問題になります⁴⁶」と切り出す。彼が注目するのはセルビアの民衆詩である（民衆詩はフランス語なら *poésie populaire*。吉江は仮に「民俗詩」と訳す、としている⁴⁷）。ロマン・ロランなどの論考に依りつつ民衆と芸術のあるべき関係を模索していた吉江らしい目のつけ所と言えようか⁴⁸。

「アルプの麓」はセルビア民衆詩に興味を持ちはじめた吉江の〈研究メモ〉といった趣もある。そこにはもちろん彼の誤解や我流の解釈も含まれているだろう。その評価、つまり吉江の解釈の是非を問い、その「可能性の中心」を探る作業はセルビア文学の専門家の手に委ねる他ないが、そのための一助となることを願いつつ、以下に吉江の情報源などに関するデータをまとめておきたい。

翻って考えると、フランスにおけるセルビア文芸の受容には当時、すでにそれなりの歴史があった。一八世紀後半から一九世紀にかけて、西欧の知識人たちは南スラブの口承文芸に旺盛な興味を示していたのである。フランス革命期まで強力な文化的拘束力を持続していた古典主義的規範から脱却しようとしたロマン派の人々は、近代化の進行とともに忘れられていった自国および他国の土着的な世界に目を向けたのだが、南スラブの口承文芸、特にセルビアの民衆詩に対する関心の高まりもその文脈に位置づけられる⁴⁹。

⁴⁵ 前掲のイザベル・グリユカの論文でも、一九一六年に多くのセルビア人学生がグルノーブルに到着したことが言及されている。Isabelle Gruca, *art. cit.*, p. 91.

⁴⁶ 『全集』第三卷、八五頁。

⁴⁷ 同前、八七頁。

⁴⁸ 「民衆劇運動」『全集』第三卷、四四九-四六一頁などを参照のこと。

⁴⁹ フランスにおけるセルビア民衆詩の受容の歴史については、特に次の二つの論考が参考になる。Pavle Sekeruš, *Les Slaves du sud dans le miroir français*, Beograd : Zadužbina Andrejević, 2002. Bojović, Boško, « La réception de la poésie populaire serbe en France dans la première moitié du XIXe siècle », in Srebro, M. (dir.), *La Littérature serbe dans le contexte européen : texte, contexte et intertextualité*, Pessac, MSHA, 2013, p. 53-64, Document mis en ligne le 27 juillet 2012 sur le site <http://www.serbica.fr>. 後者は、クロード・フォリエルなどセルビア民衆詩受容において重要な役割を演じた人たちの関心の所在を、以下のように簡潔にまとめている。「フォリエルは民衆詩（これをフォリエルは自然の詩 *poésie de la nature* とも呼ぶ）と芸術の詩 *poésie de l'art* とを明確に区別する。彼によれば、一つの民族の詩的本能が消滅するのは文明によってである。『恐らく——と彼は言う——一体どんな利点があって、文明化された西洋諸国が数年前から様々な民衆詩を採集しているのか、ということも、そう考えた場合に最も納得がいく。』ヘルダーは諸民族の精髓を民衆詩、即ち『唯一の真実な詩』の内に求めた。こうして人間精神の『自然発生的なるもの』の範疇、『原初的なるもの』の理論が形成される。ルナンはそれを近代的思考が齎した最大の発見と見做していた。」2020/10/8閲覧。

今、簡単にその受容の歴史を辿るとすれば、起点の一つとして挙げられるのはパドヴァ出身のイタリア人アルベルト・フォルティス Alberto Fortis の『ダルマチア紀行』 *Viaggio in Dalmatia* である。一七七四年に発表されたこの著作には、セルビアの民衆詩「アサン・アガの貴婦人たちの嘆きの歌」が収められていて、ゲーテがそれにいち早く反応したことはよく知られている⁵⁰。『ダルマチア紀行』はフランスでも一七七八年に訳出され、ノディエやメリメなどの作家の注目を集めた⁵¹。もっとも、十九世紀の西欧でセルビア民衆詩が広く知られるようになったのは、やはりセルビアの言語学者、民俗学者ヴーク・ステファノヴィッチ・カラジッチ Vuk Stefanović Karadžić が自国の民衆詩の本格的な採集を行い、その成果を一八一四年に世に問いはじめはじめてからのことだ。ドイツではカラジッチの一連の仕事をゲーテやグリムが高く評価し⁵²、フランスでも一八二〇年代の半ばに言語学者、文学研究者のクロード・フォリエル Claude Foriel がカラジッチの著作を通してセルビア民衆詩を発見する。この辺りから、フランスにおけるセルビア民衆詩の研究が本格的に始まったと考えてよいようだ。フォリエルは一八三一年から三二年にかけてコレージュ・ド・フランスで「セルビアと近代ギリシアの民衆詩」と題する講義を行い⁵³、一八三四年にはエリーズ・ヴォイアールがカラジッチの一八一四年の著作を翻訳上梓する⁵⁴。その後も（吉江がフランスに滞在していた時期の前後あたりまでに話を限っても）、多くのフランス人翻訳家がカラジッチの仕事の紹介に携わったが、その内の一人に、一九二〇年にパリで『セルビアの女性の歌』を刊行したフィレア・ルベスグ Philéas Lebesgue がいる⁵⁵。ルベスグはこの訳書に付した序文「スラブの魂とセルビア・クロアチアの民衆的抒情」の中で、アルベルト・フォルティス『ダルマチア紀行』の紹介に端を発するセルビア民衆詩受容の歩みを振り返りながら、これまでフランスでは「英雄叙事詩」ばかりが重んじられ、「女性の歌」が等閑視されてきたと指摘し（「英雄叙事詩」と「女性の歌」はいずれもカラジッチによるセルビア民衆詩の分類上の下位概念）、ザドルガ（中世以来南スラブに続いてきたとされる大家族共同体）を背景にした「女性の歌」の素朴さと、そこに潜む豊かな想像力を讃えている⁵⁶。『セルビ

⁵⁰ 『ゲーテと読む世界文学』高木昌史編訳、青土社、二〇〇六年、二四一-二五二頁、三三三-三三五頁を参照のこと。

⁵¹ Alberto Fortis, *Lettre de M. l'abbé Fortis à mylord comte de Bute, sur les moeurs et usages des Morlaques appellés Monténégrins*, Berne, Société typographique, 1778. 訳者未詳。仏訳のタイトルは『ダルマチア紀行』が書簡体形式の紀行文であることに因る。

⁵² 『ゲーテと読む世界文学』前掲書を参照のこと。

⁵³ Bojović, Boško, « La réception de la poésie populaire serbe en France dans la première moitié du XIXe siècle », art. cit. を参照のこと。

⁵⁴ *Chants populaires des Serviens*, recueillis par Wuk Stéphanowitsch [Karadžić], et traduits d'après Talvy, par Mme Elise Voiart, Paris, J. A. Mercklein, 1834, 2 vol. なお、Talvy は正しくは Talvj で、Therese Albertine Louise von Jakob（カラジッチの著作を独訳した人物の名）の略。つまり、このフランス語訳は独訳からの重訳である。（この情報は Paul Bénichou, *Nerval et la chanson folklorique*, José Corti, 1970, p. 105から得た。）

⁵⁵ *Les chants féminins serbes* : poèmes populaires traduits en français pour la première fois, avec un commentaire comparatif, des airs traditionnels et diverses études critiques, par Philéas Lebesgue, préface de Miodrag Ibrovac, E. Sansot.

⁵⁶ *Ibid.*, p. 22-23, p. 32-33.

『アの女性の歌』はその題名の通り、「女性の歌」に分類される抒情詩だけを訳載した一冊だ。ところで、ルベスグはこの訳書の刊行に先立ち、そこに収録されることになる訳詩の一部がある雑誌に発表していた。その雑誌こそが前述の『セルビアの祖国』であり、実はこの『セルビアの祖国』は、セルビアの文芸に関する吉江の主要な情報源でもあった。そのことは、吉江が「アルプの麓」の中でこの雑誌に繰り返し言及していることから分かる⁵⁷。彼はこの雑誌を介して、フランスにおけるセルビア民衆詩受容の歴史の末端に触れたのだった。

『セルビアの祖国』は、フランスに逃れていたセルビア人有志により一九一六年一〇月に創刊され、以後、一九一八年二月まで刊行された雑誌である⁵⁸。創刊当初はブルターニュ地方の町ヴィトレに発行所を置いていたが、じきに発行所をパリに移す。月刊誌を謳ってはいるものの、実際にはふた月で一号が刊行されるだけのこともあった。各号が大体五〇ページ程の分量だから（ちなみに創刊号は四八ページ）、大部のものではなく、むしろ「小冊子」と呼ぶのがふさわしい。出版助成金などはどこからも出ていなかったらしく⁵⁹、そのせいか、見た目もいたって慎ましい。発行部数は不明。現在、フランス国立図書館にマイクロ資料が保存されているが、今日まで伝わったのが不思議とも思える刊行物だ。

吉江は「アルプの麓」の中でこの雑誌を『セルブの郷国』と呼び、「[[セルビア人が] 巴里では『セルブの郷国』という雑誌を発行して、互いに励まし合い、それを通じて唯一消息の機関として[……]⁶⁰」と紹介しているが、なるほどこの雑誌がセルビア人同士の紐帯となり、「消息の機関」となることを目指していたことはまちがいない。異国で生きることを余儀なくされたセルビア人の子供や青少年に、自国の歴史、文化、習俗を語り伝えようとするものでもあった。（この雑誌には「亡命中のセルビアの若者のために」という副題が付けられていた。）ただし、使用言語にセルビア語ではなくフランス語を選んでいることから明らかかなように、雑誌の刊行者たちが受入国の読者に向けて自分たちの歴史や文化を発信し、その理解と関心を得ようとしていたこともまちがいない。フランス人の寄稿者もけっこういるから（その中にはジャン・リシュパン Jean Richepin など比較的著名な文学者もいる⁶¹）、この雑誌自体が両国間のごくささやかな交流の場になっていたとも言える。そこで取り上げられる話題は多岐に亘り、文芸関連の記事にも欠けていない。本稿ではひとまず吉江が「アルプの麓」執筆時点で目にし得たものに限って（つまり、その時点ですでに刊行されていた号に掲載されたものに限って）、主だった文芸関連のトピックを挙げておく。

⁵⁷ 『全集』第三卷、七九頁、八九頁。八九頁にはこうある（以下の引用中の『セルブの郷国』は『セルビアの祖国』のこと。「これらの詩」はセルビアの民衆詩を指す）。「[[……] 今巴里で、セルビヤの流鼠者のために発行せられている『セルブの郷国』という月刊誌には、これらの詩がいつも二三篇ずつ訳載されているのを見ます。それらを見ましても、狭い意味の愛国心許ではない、排他的の愛国心ではなく、共同の自由の確立、その自由郷に住むものの広い世界人文に対する使命というものを、単純に、いかにも安らかに気持ちよく歌ってあるのを感じます。この紙上でご紹介いたすのは少し偏しすぎるように思いますから差し控えておきますが、比較文芸史の材料としてはまことに興味深いものと思います。『セルブの郷国』の主宰者が、出来るだけこれら民俗詩を集めて呉れることになっています。」

⁵⁸ この雑誌を研究対象とした数少ない論考の一つに Tamara Valcic-Bulic, « Deux périodiques serbes dans la France de la Grande Guerre », *Revue de littérature comparée*, 2005/3 (n° 315), p. 341-346がある。

⁵⁹ *Ibid.*, p. 343を参照のこと。

⁶⁰ 『全集』第三卷、七九頁。

⁶¹ ジャン・リシュパンが寄せた詩「セルビアへの挨拶」*Salut à Serbie* は同誌第二号の巻頭を飾っている。

まず、創刊号にエッセー「私たちの歴史と文学を通じて」*À travers notre histoire et notre littérature* が掲載されている⁶²。そこではセルビア人とフランス人の最初期、即ち十字軍時代の交流について論じられているが（セルビアとフランスの歴史的、文化的な繋がりを強調するのはこの雑誌全体の顕著な特色の一つである）、この「私たちの歴史と文学を通じて」と題するエッセーはその後も筆者を変えながら断続的に連載されている。また、前述のフィレア・ルベスグによる民衆詩の仏訳がある。例えば同誌の一九一七年七・八月号には、「私たちの民衆詩」*Nos poésies populaires* の題の下に、ルベスグの訳した四篇の「女性の歌」（「愛の別れ」*Les adieux d'amour*、「至上の香」*Parfum suprême*、「不運な若い娘」*La jeune fille infortunée*、「魚と若い娘」*Le poisson et la jeune fille*）が載っている⁶³。さらに同年九・一〇月号には「一九世紀セルビア文学の偉大な改革者にして、民衆の歌の影響に特徴づけられた輝かしい時代の創始者」たるカラジッチの人と業績を紹介した論考が載っている⁶⁴。ロンドンで刊行されたセルビアの詩（特に民衆詩）に関する英語の本の書評もある⁶⁵。

カラジッチらによって採集された民衆詩の紹介とは別に、近代、現代の詩人や小説家の作品も訳載されている。一九世紀の詩人ペトロビッチ＝ニェゴシュ Petrović-Njegoš の長編叙事詩『山の花環』の抜粋⁶⁶、ヤクシッチ Jakšić の愛国詩⁶⁷などの他、吉江の時代に活躍していた抒情詩人ミラン・ラキッチ Milan Rakić の紹介もあれば⁶⁸、ヨヴァン・ドゥチッチ Jovan Dučić の詩のルベスグ訳もある⁶⁹。第一次大戦の渦中に作られた——少なくともそう思わせる——作品も掲載されている。その内の一つが、一九一七年九・一〇月号の「お伽噺と詩」*Contes et poèmes* 欄に載った小説家、劇作家ブラニスラヴ・ヌシッチ Branislav Nušić の散文作品「彼は戻ってくるだろう」*Il reviendra !..* である⁷⁰。この小品の「私」（男性）は、「嵐と台風が吹き荒れる」中、故郷を逃れ、いつか「ヨーロッパがパンのかけらを与えてくれる」のを期待しながら道なき道を進み、アドリア海に臨むモンテネグロ最南端の町ウルツィニに辿りつく。そこで「私」はその地に伝わる一つの民間伝承を知る。それは船で海に出て嵐に遭い、そのまま消息を絶った一人息子を一七年間待ち続けた母親の物語だった。「私」にはその物語が他人事だとは思えない。というのも、実は「私」も一人息子を

⁶² J. Radonitch (Professeur à l'Université de Belgrade), « À travers notre histoire et notre littérature. Premiers rapports et relations entre les Serbes et les Français », *La Patrie serbe*, revue mensuelle pour la jeunesse serbe en exil, n° 1, p. 8-12.

⁶³ *La Patrie serbe*, n° 9, juillet-août 1917, p. 392-393.

⁶⁴ Milivoje Pavlović, « La renaissance de la littérature serbe », *La Patrie serbe*, n° 10, septembre-octobre 1917, p. 460-463.

⁶⁵ カラジッチに関するエッセーが載ったのと同じ号に Frederick William Harvey, C. Oman, Sir Arthur Evans, T. R. Gjorgjevitch, Alice and Claude Askew, G. K. Chesterton, *The Lay of Kossovo ; History and Poetry on Serbia's Past and Present 1389-1917*, London, Kossovo Day Committee, 1917の書評が載っている。Ibid., p. 480.

⁶⁶ « Pages choisis de *Lauriers de Montage* de Petrović-Njegoš », *La Patrie serbe*, no 9, juillet-août 1917, p. 410-412.

⁶⁷ Dj. Jakšić, « La Patrie », *La Patrie serbe*, n° 9, juillet-août 1917, p. 385.

⁶⁸ *La Patrie serbe*, n° 10, septembre-octobre 1917, p. 451.

⁶⁹ J. Dučić, « Ave Serbia ! », *La Patrie serbe*, n° 10, septembre-octobre 1917, p. 434.

⁷⁰ Branislav Nušić, « Il reviendra !.. », *La Patrie serbe*, n° 10, septembre-octobre 1917, p. 442-450.

失った経験を持っていたからだ……と、大体このような話なのだが、この小品の冒頭には雑誌の編集者による注が付されており、作者がこの大戦で一人息子を失ったことが明かされている。読者は「私」と作者を同一視しないわけにはいかなかっただろう。「私」がウルツイニに辿りつくまでの過酷な行程には、祖国を占領されたセルビア人の逃避行を重ね合わせたにちがいない。と同時に、フォークロアと現代セルビア文学の結びつきの一端を垣間見た気にもなっただろう。

その一方で、読者にはいつ、誰が作ったものなのか判断がつかない作品もある。例えば一九一七年七・八月号に載った「前哨で見張りについて」*En sentinelle aux avants-postes* という詩は作者名がただ「X…」とのみ記されており、戦いを歌った詩ではあるが、いつの時代の戦いなのかは詩の内容から特定できない⁷¹。

総じてこの雑誌においてはセルビアの文芸が体系的に紹介されるというより、むしろ時代もジャンルも異なる作品が混然一体となって示されているようだ。いくつかサンプルを挙げよう。伝統的な民衆詩からは、「女性の歌」の中的一篇「魚と若い娘」を引く。「魚と若い娘」は訳者のルベスグが単行本に収録する際、「恋の歌」の章の冒頭に置いた詩であり⁷²、その平明かつ単純な語彙、構文、発想によって、同じ章に収められた多くの詩の作風を代表する体のものだ。併せて、上述のX…による「前哨で見張りについて」も引いておく。

Le poisson et la jeune fille

Assise au bord de la mer une jeune fille,
Toute seule se parle à elle-même :
« Ah ! dit-elle, Dieu cher, Dieu que j'aime,
Qu'y a-t-il de plus vaste que la mer ;
Qu'y a-t-il de plus large que la pleine ;
Qu'y a-t-il de plus rapide que le cheval ;
Qu'y a-t-il de plus doux que le miel ;
Qu'y a-t-il de plus cher qu'un frère ? »
Du sein de l'eau le poisson parle ;
« Jeune fille, pauvre écervelée,
Plus vaste est le ciel que la mer ;
Plus large est la mer que la plaine ;
Plus rapides sont les yeux que le cheval ;
Plus doux est le sucre que le miel ;
Plus cher est un ami qu'un frère. »

Adaptation de Philéas LEBESGUE

[大意：題「魚と若い娘」 海辺に座って、若い娘が／一人、自分に話しかける。／「ああ」]

⁷¹ X..., « En sentinelle aux avants-postes », *La Patrie serbe*, n° 9, juillet-août 1917, p. 416-417.

⁷² *Les chants féminins serbes*, *op. cit.*, p. 67.

と彼女は言う。「いとしい神よ、私の愛する神、／海よりも大きなものがあるでしょうか。／草原よりも広いものがあるでしょうか。／馬よりも早いものがあるでしょうか。／蜂蜜よりも甘いものがあるでしょうか。／兄弟よりもいとしいものがあるでしょうか。」／水の中から魚が言う。／「若い娘よ、愚かな娘、／空は海よりも大きい。／海は草原よりも広い。／目は馬よりも早い。／砂糖は蜂蜜よりも甘い。／男友達は兄弟よりもいとしい。(フィレア・ルベスグ訳)】

En sentinelle aux avants-postes

Pour la sécurité de tous mes camarades,
Je veille, cette nuit, sentinelle attentive,
Indifférent au froid, dans l'ombre, je regarde
La lune qui blémit et brille dans les cieux.
Camarades, dormez ! Qu'un tranquille sommeil
Redonne à votre corps la force et l'énergie,
Car à l'aube prochaine, à cette même place,
Le tonnerre effrayant des combats fera rage.
Demain, hélas ! Ces champs, baignés de rayons pâles,
Peut-être seront-ils rougis de notre sang...

Dormez, mes camarades,
Je suis en sentinelle !

Et toi, douce compagne, ô Lune ! Lune claire
Qui brilles tout là-haut, comme un flambeau d'argent,
Parle-moi du village où sont restés les miens.
Ce qu'ils sont devenus, saurais-tu me le dire ?
Sans repos ni sommeil, ma vieille mère pleure,
Pleure et gémit sans cesse, esseulée en la nuit,
Ma femme, qui m'attend, frémit et se lamente
Et dit en soupirant : Le reverrai-je un jour ?
Peut-être mon fils, jeune enfant au berceau,
Dans un rêve, parfois, ouvre ses petits bras,

En appelant son père,
Son père en sentinelle !

Les yeux scrutant la nuit et l'oreille aux aguets,
Dédaigneux du danger, je suis prêt à bondir

Comme un lion blessé sur l'ennemi rampant...
 Mais voici qu'à présent mes compagnons se reposent
 Dans le calme sommeil des vaillants et des braves.
 Demain ils dormiront peut-être, étendus morts,
 Quelque part, oubliés sur la plaine déserte !...
 Peut-être périrai-je aussi dans la bataille...
 Cela, c'est le secret que garde l'Éternel...

.....

Dormez, mes camarades,
 Je suis en sentinelle.

X...

(Adaptation du serbe par M. Pinasseau et M. Kangrga)

[大意：題「前哨で見張りについて」 私はすべての同志の安全のために／今夜、注意深い歩哨として不寝番をする。／寒さを気にせず、私は闇の中で、／空に青白く輝く月を見つめる。／同志たちよ、眠ってくれ。どうか穏やかな眠りが君達の体に力と活力を取り戻させますように。／というのも、次の夜明けには、この同じ場所で、／戦闘の凄まじい雷鳴が鳴り響くだらうから。／ああ、青い光に浸されたこの野原が、／明日は私たちの血で赤く染まるかもしれない。／／眠ってくれ、同志たちよ。／私が歩哨をしている。／／そしてお前、優しい仲間、おお、月よ。／銀の松明のようにあの高みで輝く明るい月よ。／私の家族が留まった村のことを私に語ってくれ。／私の家族がどうなったか、お前なら話してくれるだろうか。／憩いも眠りもなく、私の老いた母は泣く。／夜、一人きりで絶え間なく泣き、呻く。／妻は私を待ちながら、体を震わせ、嘆く。／そして溜息をついて言う。「私はいつかあの人にまた会えるだろうか。」／揺籃にいる幼い私の息子はおそらく／夢の中で時おり小さな両腕を開き、／／父を呼ぶだらう。歩哨をしている父を。／／目は闇夜を穿ち、耳をそばだて／危険も意に介さず、私は忍び寄る敵に飛びかかる用意が出来ている。／傷ついたライオンのように飛びかかる用意が。／だが、今、私の同志たちは、／勇猛果敢な者たちの静かな眠りの中で休息している。／明日、彼らは死んで横たわって眠るかもしれない。／どこか人けのない草原で忘れ去られたまま。／私も戦いで命を落とすかもしれない。／それは神のみぞ知ることだ。／／眠ってくれ、同志たちよ。／私が歩哨をしている。(X…作、セルビア語からのピナソー、カングルガ両氏による訳)]

なお、仏訳は十二音節詩句（アレクサンドラン）を採用し、句切りの位置も一定している。ルフランとそのヴァリエーションに相当する箇所は六音節＋六音節。

吉江はこういう詩をどう読んだのだろうか。彼は今もなお民衆詩を生み出すセルビアの精神風土が消えてはいないと思っていた。グルノーブルで出会ったセルビア人学生の言葉を引きながら、こんなふうに述べている（以下、冒頭の「斯ういう形式」は「民衆詩」のこと）。

斯ういう形式は、どこの国にもあることで、その中には口碑、伝説、自然敬畏、祖先崇拜、英雄物語などのうたい込まれていることは稀しくもないことです。ただそれが古い形となって既に結晶してしまっているのではなく、今に到るまで生きて動いているということは面白いと思います。生きて動いているということが、単に現在の人間がそれを歌い誦していつも感動しているというのではないのです。つまりこの民俗詩が鑑賞対象として価値を失わずにいるというだけではなく、この民俗詩が今もなお創作力をもって活動をつづけているということです。

彼等学生の一人はこう言います。「自分等の国には専門の文学者の偉い人はいないけれど、何か皆の頭の上へ大きなことがふりかかって来ると、何人ともなくそれを歌にして、いつともなく皆がそれを歌うようなことになって了う。」と。それが次に古いものの中へ繰り込まれ、その間に自然淘汰を受けて好いものだけが残ることになるのでしょう。何のことはない、国民全体が時々合作の詩を作るようなものです⁷³。

吉江はX…の詩を、古くから伝わる民衆詩の一つだと思ったかもしれない。だが、そうではなく、第一次大戦に巻き込まれた無名の民衆の一人の作と受けとった可能性もある。ここにあるのはいわば民衆詩の萌芽であって、幸いにもこの詩が人々の記憶に残り、歌になって歌い継がれていけば、いつしか古くからある民衆詩の仲間入りをすることになる、と、そんなふうに考えていたかもしれない。人々に歌い継がれるうちに徐々に元の詩に変化が生じ、装飾的な表現が削ぎ落とされるなどすれば、いつか「魚と若い娘」のように素朴な輝きを持った詩に生まれ変わっているかもしれない、と、そんなことを想像していなかったとも言えない。吉江はセルビア人の音楽にも触れつつ、彼の〈研究メモ〉をこう締めくくっている。

この民俗詩と共に、彼等の音楽がまた特殊な発達をなして来ているように思います。或る専門家が或る階級のために作った音楽というようなものではなく、民衆全体が作者であり、歌い手であり、同時に鑑賞者である、という風な発達の仕方をして来ているからです。イゼエルの岸の丘の上や、ブウルジュの湖水の岸などで、彼等が集まってこの郷国の歌をうたっているのを聴くと、全く一種の感じにうたれます。兎に角、文芸上、単に民衆を対象とし民衆を材料とし、それを教え、それを楽しませ、或いはそれに代わって声をあげるだけでなく、民衆そのものの衷心直接の発露、創作心の喚起を導く一傾向があるとするならば、これらの民俗詩、これらの音楽を調べて見ることも全く無用なこととは考えません。私はいまここで、夏休みの間アルプスの麓で偶然知ったこれらの気の毒な家郷を失った連中のために、少しの暇を割いてその国情と文芸の一端とをお知らせするだけの次第です⁷⁴。

フランス遊学中にパリのみならず「アルプスの麓」の一地方都市での生活体験を持ったこと、また、フランスの伝統文化に親しむだけでなく、そこに流れ込む異文化に触れたことは、フランス文学者、文芸批評家としての吉江が複眼的な視点を獲得するのに与った

⁷³ 『全集』第三卷、八七-八八頁。

⁷⁴ 同前、八九-九〇頁。

う。彼がセルビアの文芸に寄せた興味は、ロマン・ロランの「民衆劇」、シャルル・ルイ・フィリップの「大地の声」、さらにミストラルを中心とするプロヴァンス文学復興運動への関心とも合わさって、帰朝後に吉江自身がその一翼を担うことになる農民文学運動の一つの伏線になったとも考えられる⁷⁵。

（2020年10月30日受理，11月11日掲載承認）

⁷⁵ 本稿は科学研究費基盤研究（C）「近代文学における地球の表象——吉江喬松を中心に」（課題番号20K00518、研究代表者：渋谷豊）の成果の一部である。